

鎌倉と見るものもあり、平安初期と見るものもある。

フシミン 伏見新 石川郡宮櫛庄に屬する郡落。もと伏見から出たのであらうが、今は伏見新のみで伏見がない。→ヤマシナ 山科。

フシミテイ 伏見邸 文祿三年豊臣秀吉が伏見城を築き、十月十六日築築第からこゝに移つた。是を以て諸侯皆邸をこの地に構へたが、前田利家の住んだ所は西丸の下にあつて、利長の邸も亦之と相並び、その間僅かに榊原康政の館を挟むだけであつた。後又利家豊臣秀次の薨するに及び、秀吉は利家にその遺館を興へ、利家之に移り住んだ。同年八月廿九日明の遊撃將軍沈惟敬を襲し、慶長二年四月二日及び九月某日に秀吉の臨んだのも、皆此の邸である。三年八月十八日秀吉伏見に薨じ、四年正月十一日子秀頼の大坂に移るに及び、利家も亦隨うて彼の地に赴いたが、伏見邸は尚依然として存続した。關原役後、利長は伏見邸を解いて材を封國に運搬し、慶長十四年高岡城建築の際之を組立てたが、十九年利長薨じて廢城となつたので、再びその書院を移して、御旅屋の用に供した。

フシユウブンソウキ 武州文蔵記 一冊。藩士津田太郎兵衛が、延寶六年前田綱紀の命によつて、武州浦和附近の文蔵村の社寺にある古記録を捜査した時の紀行である。

フシユフセハ 不受不施派 元祿四年四月廿七日幕府は日蓮宗にして不受不施を唱ふることを嚴禁した。これは先に一たび禁じたことがあるが、小湊の誕生寺、碑文谷の法華寺、

谷中の感恩寺等が、悲田宗の名を以て之を鼓吹したからであつた。當時金澤にあつて不受不施を主張するものに、本覺寺・本長寺・妙法寺・本光寺・安立寺・本性寺・妙感寺があつたが、藩は五月廿四日は等諸寺に命じて羽咋郡瀧谷妙成寺に屬せしめた所、諸寺は直に之に従うた。

フシヨウ 舞杖 →ラグラブシヨウ 小倉舞杖。

フシヨウサイセイアンセイカアンシユギョウシヨウ 不生齋政安靜家庵主行狀 一卷。享保八年沙門古仙淳の撰。金澤町人中田庄三郎の祖先政安の行狀書である。

フシヨウジ 普正寺 石川郡大野庄に屬する郡落。

フシヨニシユライキ 扶助人由來記 →カノウエツトウフシヨニシユライキ 加能越等扶助人由來記。

フシンカイシヨ 普請會所 御普請奉行の役所である。御普請會所は始め蓮池の續きに在つたらしいが、後に大手町の末なる黒梅屋橋の橋爪西方に移轉した。明治二年版籍奉還の際、御普請會所を廢してその建物を接賓館と改稱し、三年又神護寺の致遠館をこゝに移し、六年八月共立社と稱する銀行を起した。

フシンガイシヨドウクゲトノヘブギヨウ 普請會所道具調奉行 御普請會所道具調奉行の初は詳かでないが、御定書に普請道具拵奉行齋藤市左衛門・遠田清助の見えるのが、この職の初名であらう。

フシンガイシヨドウクワタシブキヨウ 普請會所道具渡奉行 其の初は詳かでないが、萬治三年神保源助の勤めたことが見える。寛

文十一年八月堀田源助、延寶六年十月種子田牛之助が之に任じた後連綿し、享保末年には二人となつた。安永四年三輪元右衛門命ぜられて道具調奉行から之を兼ね、九年十月その播後後常に御普請道具調奉行よりの兼職となつた。

フシンガイシヨヨコメ 普請會所横目 御普請會所横目の始は明らかでないが、往古杉野善三郎・小川孫助のこれを勤めたことがある。寛文四年には神保源助、元祿十七年には中村庄藏が命ぜられ、以來一人充勤務した。

フシンギン 普請銀 →ヤクギン 役銀。

フシンサイシキ 武神祭式 一冊。水野三春の著。武道の守護神と、その祭器・神供等のことを述べ、神前裝飾の圖をも附したものである。

フシンブギヨウ 普請奉行 御普請會所の奉行で、城郭の石垣・密構御堀塹・道路橋梁の如き土工に關することを掌り、建築營繕は御作事奉行、灌漑用水は定檢地奉行の職務であつた。御普請奉行の初は明らかでないが、寛文中鈴木孫左衛門・別所勘左衛門・杉山市丞・氏家内藏允の各見え、萬治二年に近藤新左衛門・津田次郎左衛門、慶安元年には宮崎太左衛門・熊谷久右衛門が命ぜられ、寛文以降連綿し、その頃は四人も居たが、元祿年中から三人となつた。又御普請會所下級許があつて之に屬した。

フシンヤシナヒクサ 婦人養草 十冊。貞享三年村上武右衛門著。婦人三從の教より、行事言辭等に關する教訓、和漢の貞女烈婦の例等を擧げたもの。自序自跋がある。著者は加賀藩士にして三百石を受け、元祿四年歿し

た人。

フスイ 不睡 →ツチダフスイ 土田不睡。フセコハツシヨウコウ 布勢湖八勝考 一冊。富田景周著。越中國古國府勝興寺の住僧關郁が、萬葉集の遺蹟中から布勢湖・二上山・垂姫崎・多胡浦・古江村・平布崎・有磯渡・日水江の八勝を撰んで、その圖を原在中に、題詠を京師の指紳に求めたが、文化六年更に景周に地誌的にその考證を求めたのが本書である。

フセリギヨウジヤ 臥行者 元亨釋書に泰澄の門下臥行者を、能登島の産とするので、それに就いて種々の傳説が生まれて居る。能登名跡志に、「其昔泰澄大師の御弟子臥りの行者は、此島の路の人にて、元亨釋書云、大寶二年有少沙彌一自能登島來調云々、臥雪裏、澄名爲臥行者」とあり。此行者の母の住める所を祖母浦と云ひて、其塚と云うて今にあり。此ふせりの行者は朝暮限り暮して靈術あり。常に住みける所を園村と云ふ。寢島とて觀音堂あり。昔は大樂寺とありしに今は寺なし。此觀音は、臥の行者の鉢の子の中に觀音の像ありと云へり。靈像にて奇蹟あり。又元亨釋書曰、逢北海租船二飛鉢乞供云々。是臥の行者の鉢の子飛行して神漕舟に供物を乞ふ。其至る船の者共供物を興へしと也。或時出羽國公米千石積みし舟此神を通りしに、此鉢の子來りけれ共、上乘せし淨定と云ふ者一粒もゆるさずありしに、千石の船中の米忽ち虚空へ飛行。此事を臥の行者へ淨定なげきければ、行者の曰く、其米我師へ捧げし也、石動山へ行き我師に其事を申べしとありければ、淨定山上しけるに、石動山の講堂の前に